
河童戦記～狸の章～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河童戦記／狸の章／

【Zコード】

Z25480

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

河童戦記第四部。苦楽魔にて、鳥天狗の翔一を道連れにした時太郎とお花だが、意外な相手が姿を表す。それは人語を喋る狸たち！さて、この狸たち、時太郎に対し、とんでもない要求を突きつけるのだが、京の都を目指す時太郎の旅はどうなるのか？

食事

差し出された木の実や、ヒョウ虎魚などの食料を見て、翔一は世にも情けなさそうな声を発した。

「あのう……たつた、これだけでいいぞこますか？」

お花は頷き、眉を上げた。

「そうよ、充分じやないの？」

「はあ……」

翔一は、溜息をつき、受け取った。生の水虎魚を見て肩を竦める
と、懐から凸^{レンズ}玻璃玉を取り出す。日の光を集めて枯れ草に火を点ける作業に着手する。

暫くすると、枯れ草の真ん中からぼつ、と音を立て、炎が燃え上
がつた。翔一は枯れ枝を折つて水虎魚に突き刺し、火に炙る。

時太郎は、呆れて声を上げた。

「折角の美味しい水虎魚を、焼くのか？」

「はい、生魚は毒でござりますから」

「そうかあ？ 魚は生で食つたほうが、遙かに美味しいぞ！」

時太郎は、すでに水虎魚に頭から齧りついている。お花も同様だ。翔一は焼きあがつた水虎魚にかぶりついた。ほふほふと熱いところを口の中で転がし、それでも一心不乱になつて食べている。

木の実を眺め、ぱつと口の中に放り込んだ。ぱりぱりと音を立て
噛み、飲み込むと、今日の食事は終わりである。

河童は普通、一日一食でことたりる。

苦樂魔から離れて数日、翔一は時太郎とお花の旅になんとか従ってきたが、この一日一食の習慣ばかりは、一向に慣れないと判らない。しかし、時太郎とお花は、まるで気にしていない。

京の都を目指しているが、いつたい何時になつたら到着するやら立ち上がる時太郎とお花を、恨めしげに翔一は見上げた。

食事で中断した旅の再開である。

歩き出した二人の後を、翔一はとぼとぼと従いていった。足取りは重く、肩をがつぐりと落としている。

腹がすいた……。

苦楽魔にいたころは、朝、昼、晩の三食が習慣で、白い米を腹いつぱい食つていたのに、旅が始まつてからは、一握りの木の実、水虎魚や電氣鯰でんきなますが精一杯である。

さらには、二人が時折、芋虫や蜥蜴とがけ、蚯蚓みみずの類を捕まえて、さも美味そうに食つうのには耐えられない。

最初、勧められたが、悪食は断固として辞退した。虫を食つなど、信じられない！

三人は森の中を歩いていた。

立ち並ぶ木々は鬱蒼とした照葉樹林で、獸道のよつな細い踏み分け道を辿つていぐ。苦楽魔の山を突つ切れば、やがて耶馬師炉やましろの国に入る見当だ。京の都は耶馬師炉國の領域にあるのだ。

京の都は北に苦楽魔、東に威狛いじま、南を鬼州きしゅうの山に囲まれている。西側は彌環湖ひわに面していた。

苦楽魔と威狛いじまは連なつており、今いる森を抜ければ、京の都はすぐ目の前のはずだ。が、翔一には、今少し自信がない。なにしろ苦楽魔を出るのは初めての体験だ。

空を飛ぶことができたらなあ……。

翔一は大きな眼鏡の奥から空を見上げた。

大天狗さまから葉団扇を頂いたが、いまだに空を飛ぶことすら、ほんの少しでも浮くことすらできない。

くつ……腹の虫が鳴いて、翔一は思わず手で腹を撫でた。空腹で田が回りそうだ！

きょときょと落ち着きなく、翔一は辺りの森を眺めた。森は食べ物の宝庫……時太郎とお花の言葉である。事実、二人は食事になると森に分け入り、様々な木の実を探つてくる。一人の田にはそれらの食糧がすぐに判別できるのだろうが、翔一には無理だ。

あれは食えるのだろうか？

田に入る木の実を見て翔一は口の中に唾を湧かせた。しかし、うつかり口に入れて腹を壊したらと思つと、なかなか、その気になれない。

そんなことばかり考えていたので、翔一はすっかり周囲に気を配ることを怠つていた。

どん、と翔一は時太郎の背中にぶつかった。

「あ、申し訳ありません！ つい、うっかり……」

慌てて顔を挙げ詫びを入れる翔一を、時太郎はまるつきつ無視している。

その目が鋭く辺りを見回していた。
なにを気にしているのだろうと、翔一も立ち止まり、視線を周囲に動かす。

いつの間にか両側が切り立った崖になつていて、その真ん中を、細く道ができていた。

こんなところで襲撃されたら防ぎようがない。それで時太郎は油断なく辺り一帯に気を配っているのだろう。

道は先のほうで急角度に右に折れ曲がり、通路のようになつている。当然、先は見えない。

「どうしますか？」

翔一は恐る恐る時太郎に話しかけた。

時太郎は「うん」と頷いた。

「行くしかないだろうな。なんだか、いやな予感がするけど
お花も贊同する。

「そうね、あたしもそう思つ」

時太郎とお花は歩き出した。その後から翔一も従っていく。

歩いていくうち、前方から妙な音が聞こえてくる。

なんだろう、あの音は？

ひょい、と顔を上げると時太郎と田が合った。

「なんでしょう、前方から聞こえてくる音は……？」

「太鼓を叩いているみたいね」

お花が感想を口にした。

翔一はぽん、と手を打った。

「そうです！ これは太鼓の音でござります！」

ぽんぽこぽん……。太鼓の音は、そんな響きをしていた。

角を曲がった三人は「あつ」と立ち止まつた。崖の両側を塞ぐよう、城が建っていた。

城の正門には一匹の狸が手に槍を持ち、辺りに鋭い視線を配つている。

「止まれ！」

三人の姿を認めた狸はさつと手にした槍を構えた。

「ここは、狸御殿である！ 怪しい奴らめ！」

驚いた三人は後戻りしようと、今やつて来たばかりの道を振り返つた。と、そこにも数匹の狸たちが槍や、弓矢、刀を構えて立ち塞がつている。

ぐつ、と手にした武器を三人に突きつける。

「動くな！」

狸たちは猛然と三人を取り囲んだ。

繰り返し

ほんほこほん！
ほこほん！ ほん！

御殿の狸たちは、はらうがま腹鼓を無心になつて打つてゐる。

武器を突きつけられ、三人は狸御殿へと引き立てられていつた。ぎいい と、御殿の正門の扉が觀音開きに開いた。

内部は色彩の氾濫であった。

柱は真つ赤、壁は鮮やかな檸檬^{レモン}黄色、天井は真つ青に塗られ、床は桃色の大理石でできている。

さりにあちこちに、どこから調達したのか、掛け軸や屏風が所狭しと飾られている。描かれているのは、すべて狸を主人公としたものである。

無数の狸がこの狸御殿を建設しているところを描いたもの、合戦だろうか、狸たちが思い思いに武器を取り、様々な妖怪たちと戦っているところなどが描かれていた。

どの絵にも、必ず目立つ位置に巨大な体躯の狸が描かれている。どうやら同じ狸らしく、顔の模様が同じであった。

「また、同じような目に遭つちまつたよ……」

時太郎は苦々しげに呟いた。

苦樂魔くらまでも、同じような扱いを受けている。いつも体験は、繰

り返す性質のものだらつか。一度あるじては、あるとか……。

お花は翔一に話しかけた。

「あんた、ここに狸がいるって、言わなかつたわね」
翔一は困惑した表情を見せた。

「わたくしは、苦楽魔の外に出た経験がないので、不案内でござります。ここに、このような狸御殿なるものがあるなど、ついぞ存じませんでした」

すると、階段から一匹の狸が降りてきた。どうやら地位の高い狸と見え、三人を連れてきた狸は、さつと敬礼をする。

「そいつは何者じや？」

やけに年寄りらしく、毛皮に灰色の毛足が混じっている。
声は嗄れ、軋るようであった。

「はつ！ 苦楽魔の方向から我が狸御殿へと参つた連中でございます。見ての通り、人間と河童の娘、それに鳥天狗という、有り得ない組み合わせの三人連れで、胡乱な奴ばらと見て、連行いたしました！」

槍を持つた狸は、きびきびと得意げに報告する。

「つむつむ、と年寄りの狸は頷いていた。じゅり、と三人を眺め口を開いた。

「名前を聞かせて貰おつか……」

「あたし、と時太郎が前へ出た。

「おれは時太郎！ ただし、河童の時太郎だ！ 人間じゃないぞ」
狸は「ほ！」と口を開いたが、何も言わなかつた。お花は、にっこりと微笑んだ。

「あたし、お花です！ よろしくね！」

おずおずと翔一が答える。

「わたくし、見ての通りの鳥天狗の翔一と申します。あの、これは、
どういうお取り調べでござりますか？ わたしども、何も武器を突
きつけられるような罪は、犯してはおりませんが」

狸は、さつと武器を構えた狸たちに合図した。

その合図に、狸たちは手にした武器を引いて後ろに下がる。

「すまんかった。なにしろ我が狸御殿の姫さまがご婚礼を控えておつて、みな神経を尖らせておるのじゃよ。ああ、わしは芝右衛門といつ、この狸御殿の家老である。城主の刑部狸さみさまのお留守を預かつておる最中でな、まあ、氣を悪くせんで貰いたい」

それを聞いて、お花は手を叩いて喜んだ。

「「」婚礼！ 素敵！ 相手は、どんな人……じゃないわね、狸なの？」

「芝右衛門と名乗った狸は、にこにこと相好を崩した。
「もちろん、ご立派な若御でな、隣国まみあなの狸穴さみあなより刑部狸さまが伴つて、もうすぐ渡られる手筈になつておる。今夜、祝宴が執り行われる予定じやよ」

それを聞いて、お花は更に眼を輝かせた。
時太郎の腕を掴んで搔き口説く。

「ねえ、祝宴だつて！ あたし、狸の祝宴つて見てみたい！ あんたも当然そうよね？」

時太郎は「え？」と意外そうな表情になつてお花を見つめた。お花はもう、夢中になつている。

芝右衛門は賛成した。

「それがよい！ 狸以外の生き物もこの祝宴に参じたとなれば、刑部さまも殊の外お喜びになられるじゃろつ。是非、参加していって貰いたい！ それにご馳走も出るしな……」

「」馳走、といつ言葉に、翔一の目が、きらり、と否応なしに光つた。熱心に時太郎に向かつて話しかける。

「時太郎さん、わたくし、狸の祝宴には非常に興味がござります。後学のため、ここは芝右衛門さまのお誘いに乗つたほうが、断固よろしかろうと愚考いたします」

とうとう時太郎は押し切られた格好になつた。

「いいよ、もう……。その祝宴とやらに出ようじゃないか」

「ふう」と芝右衛門は笑顔になつていた。

祝宴

夜になり、祝宴が開始された。

狸御殿の宴会場に狸たちが勢揃いし、次々と料理が運ばれる。時太郎たち三人は、芝右衛門と並んで一番の上席に案内された。上機嫌の芝右衛門は、会場をいそいそと移動して、遗漏の有無の点検に余念がない。

「さあさあ、まずは料理を召し上がりつゝーーこの田のために料理人が腕によりを掛けて用意させたものばかりじゃぞ」

時太郎とお花は目の前に運ばれた料理に「わあー」と歓声を上げて目を輝かせた。

「美味しそう！ ねつ、翔一も遠慮しないで食べなさいよーー」

勧められた翔一は、げつそりとした顔をお花に向けた。

「はあ……」

力ない返事をする。

手には箸を持つているが、箸先は虚しく料理の上を迷っているだけだ。

出された料理と言つのが……。

虫だつた！

芋虫、ザザ虫、百足、沙蚕、蝉、蜻蛉、飛蝗に蝗……。様々な虫が煮付けになつたり、油で揚げられたり、砂糖漬けになつたりして、ずらりと並んでいる。主菜は赤蝮の特大姿焼と噛付亀の活け作りだ。

時太郎とお花は、それらを夢中になつて口に入れている。皿い皿いと何皿もお替りをして、舌鼓したづづみを打つていた。

ぱんぱんぱんと左衛門は手を叩いた。

「余興じゃ！ さあ、腹太鼓自慢の者ども、お客様に狸の腹太鼓を聞かせておくれ！」

はあーっ、と数匹の狸が勢ぞろいし、腹太鼓を叩き出した。

刑部狸

ほんぽー、ほんぽーー。

ほんぽー、ほん！

すつほんほん！

それに合わせて歌が飛び出す。

ようこゝれ狸御殿へ！

われら狸、陽気な仲間。

毎日楽しく暮らすのが一番さー！

今夜は狸姫の田出度いー婚礼。

花も恥らう姫さまは芳紀十とハ。

お花は手を叩いて喜んでいる。

狸たちの歌の途中、宴会場の奥から別の一団が現れた。
袴をつけた狸たちに先導されて現れたのは、歌にあつた当の狸姫
である。

出された料理を前に途方にくれていた翔一は、見るともなしに現
れた狸姫を見ていた。

豪華な花嫁衣裳を身につけた狸姫はゆっくりと正座した。顔は狸
そのものである。目はぱっちりとしているが、それが女らしい顔な
のかどうなのか、判るはずもない。

ぱりぱりぱりぱり……と狸たちは姫に対して一斉に拍手して歓迎して
いる。

と、姫が着座すると、反対の入口が開いて、更なる一団が現れた。巨大な狸が、悠然と姿を見せる。

のつしりと足を踏み入れた巨大狸は、ぎょろりと大きな目玉を動かして宴会場を見わたした。

「きょうへぶ刑部狸さまじゃ！」

畏敬の声が上がる。刑部狸と呼ばれたその狸は「うむ」と重々しく頷いた。

「みなの者、楽しくやつてあるかな？」

刑部狸の声は宴会場に轟いた。

姫の隣に席についた刑部狸の前に、ちょこちょこと小さな狸の団が整列した。これは豆狸まめだの一団である。豆狸たちは手に乗るほどの大さしがない。

豆狸たちは、ちょこんと整列すると、全員が刑部狸の前でペコりとお辞儀をして、唄いだした。

我らの刑部狸さま。

あなたこそ我らの太陽、我ら狸たちのお父さま！
あなたがいなければ狸には希望も無く、あなたがいなければ明日も無い！

「豆狸たちは甲高い声で唄つて踊つている。
それを見ていた芝右衛門は首を捻つた。

「はて、どうしたところのじゅうひつ。刑部狸もまは**狸穴**で、姫さまの嬢殿を連れ帰る手筈じゅうに……」

ひょい、と腰を上げると芝右衛門は刑部狸の近くへ寄つて行つた。

「芝右衛門」を見た刑部狸は、ぎうりと目を光らせた。

「なんじや、芝右衛門。何か申したい儀でもあるのか?」

芝右衛門は「へつ!」と恐縮した。

「あのう、姫さまの嬢殿は……?」

その言葉に、狸姫も顔を上げた。刑部狸は瞬時に、苦い顔になつた。

「嬢殿は、来ぬ!」

「えつ? いつ、今、何と仰せられたので?」

「だから、来ぬ、と申したのだ。嬢殿は、この縁談を断つてきた!」

「ひえーつ!」と、芝右衛門は悲鳴を上げ、半ば腰を抜かした。

宴会場の音楽がぴた、と停止した。狸たちは刑部狸の意想外の言葉に呆然となつている。

そこで、初めて姫が口を開いた。

「お父さま、それは、どうこうことですの?」

「どうも、いうもない。嬢殿は、この縁談を断つてきたのじゅうよ」

「理由をお聞かせ下さいますか?」

「そんなものは、一切ない! とにかく嬢殿は、同行を断つてきた。狸穴を離れたくないと言つてな」

見る見る狸姫は柳眉を逆立てた。

「侮辱です！ 納得できません！ この宴会は、何のためなのです
か？ わたし、このような恥を搔かされ、生きていけませんわ！」
「どうせよと云つのじや。婿殿は来ぬのだぞ。しかたないではな
いか」

狸姫は、つん、と横を向いた。

「それでは、替わりの婿殿を探して頂きます。わたくし、どうして
も婚礼を挙げたいのです」

刑部狸は呆気にとられていた。

「そんな無茶な……。婿殿といつても、右から左に探すわけにはい
かんではないか」

姫は薄つすらと笑つた。

「この宴会場に来ている者から探しします。それなら、よろしいでし
ょ？」「うう」

「この中で？ お前、気に入つた相手でもあるのか？」

姫は頷いた。

「あの者を、わたくしの婿殿に！」

さつと躊躇なく指差す。指を差された花婿候補は、翔一だった！

遠くから狸の腹鼓が聞こえてくる。

時太郎とお花、芝右衛門と刑部狸たちは、宴会場から離れた別室で向かい合っていた。

刑部狸は巨大な身体を持て余すようにして、どひつ、と座り込んでいる。股座から八畳敷きの巣丸を広げて、座布団の替わりにしていた。

「まつたく、我が娘ながら、何を考へておるのか、さっぱり判らん！ 選りに選つて鳥天狗を婿にするとはな！」

苦々しげに呟いた。

芝右衛門は困惑した表情で刑部狸を見上げた。

「いかがいたしましよう？ このまま宴会を続けましようか？」

じろり、と刑部狸は芝右衛門を見つめた。

「お前、どう思うのだ。鳥天狗が我が娘の婿に相応しいか！ どうなのだ！」

「そ、それは……なんとも申し上げかねます。拙者も姫さまの気紛れには……」

「ふん」と、刑部狸は鼻を鳴らした。

「まあ、よい。あれのやつたいやうにやらせてやれ！ やつせ氣紛れだ。いづれ鳥天狗など、婿にはならぬと觀念するだひつ。婿探しは、その時になつて改めてすればよい」

「それは、困るわー！」

お花が叫んだ。

「あたしたち、京の都に着かなければならぬのよー。こんなところで足止めを食つているわけにはいかないわー。」

刑部狸は首を振つた。

「おぬしらの都合など、知らぬー。婚儀はすでに始まつておる。ともかく、姫が諦めるまで、鳥天狗の翔一とやらは、ここに留まつて貰つ」

「そんな、勝手な……」

時太郎も呆れていた。

「それじゃ、姫さまが翔一に飽きるまで、つてことかい？ 馬鹿にしてらあー！」

芝右衛門は慌てた。

「これ、そのような無礼な物言い、あと身分をわきまえんか」

刑部狸は芝右衛門を押さえた。

「待て。その小僧の言うことも尤もである。確かに姫の気紛れは、わしも手に負えぬ。だが、問題は姫殿が来ぬ、ということだ。つまりは、姫殿がこの狸御殿に来て、姫との婚儀を滞りなく行えよいのだ」

時太郎とお花は顔を見合わせた。

「それじゃ、姫殿を連れてくればいいんだな？ せつこうとか？ 芝右衛門が眉を寄せた。

「おぬし、何を言い出すのじじゃ？」

「おれが姫さまの嬪殿を連れてくるつて、ことわー。 狸穴に出かけ
て、連れてくる！」

刑部狸は、にやりと笑つた。

「よぐべ申した！ 時太郎とやら、おぬし狸穴に向かい、なんとし
ても嬪殿を連れ帰つてこい！ それなら翔一とやらも、おぬしらの
旅を続けることができるであろう

祝言

狸御殿の窓から翔一は、外を覗き込んだ。朝の光が斜めに差し込み、朝靄が白く辺りを靄に包んでいる。

御殿の裏口が開き、そこから時太郎とお花が外へ歩き出す。芝右衛門がその後に続き、なにやら時太郎に熱心に話しかけている。聞いているのかいないのか、時太郎は面倒くさそうに頷いていた。やがて時太郎は手を振つて歩き出す。その後ろにお花が続いた。二人の姿は朝靄の中へ溶けるように消えていった。

ほつと翔一は、溜息をついた。

昨夜、時太郎はお花と一緒にこの部屋へ訪ねてきて、姫の婿を必ず連れ帰るつもりだと決意を述べた。婿を連れて帰れば、翔一は自由の身になるという。

それでこの早朝、時太郎は出発したのだ。狸穴へ、姫の婿殿を連れに。翔一は時太郎たちの言葉を信じるしか、道は無かつた。

振り返り、現在いる部屋を見回す。

ここが翔一と狸姫に用意された新居である。高い天井、床に敷き詰められたのは絹毛氈で、何段重ねにも積み上げられた敷布団がなまめ艶かしい。

ぎゅう、と翔一の腹の虫が鳴つた。

昨夜から何も口にしていない。

なにしろ出された料理が、虫や蜥蜴、蛇などの見ただけで醜悪な

姿をした得体の知れないものばかりで、修一は完全に食欲をなくしていった。

ぽつん、とこの部屋に翔一は唯一人、取り残されていた。

あれで自分は狸姫の婿にされてしまったのだろうか？　宴会は容赦なく進行し、気がついたら三々九度の盃を交わすところであった。その際、ちらりと隣に座る狸姫を見ると、まったく動じず、一抱えもありそうな巨大な金杯を両手で抱えて、ぐびぐびと飲み干していた。

飲み干すと、微かに溜息をつき、まっすぐ翔一を見つめて、口を開いた。

「これでわたくし、翔一殿の嫁となりました。不束者でござりますが、これからよろしうつ可愛がって下さごませ」

言葉はしおらしい。ところが、姫の口調は、喧嘩が果たし合いに乗り込むかのような切り口上なのだ。

「断れば命がないぞ」と脅迫されているようすで、翔一は思わず、ぶるつと震えを感じていた。

姫の背後には城主の刑部狸が皿のよつた大目玉を見開いて、じつと翔一を射すくめるように見つめている。殺氣立つた無言の圧力に、翔一は思わず答えていた。

「よ、よろしく……」

それだけ言うのが精一杯で、どつと噴き出す汗が全身を濡らしているのを感じていた。

その後は何がどうなったのか、てんで覚えていない。

気がつくと、この部屋に通され、布団に座つて、狸姫と顔をつき合わせているところだった。

よしやく翔一は、狸姫に質問をする余裕を取り戻した。

「姫さま、いつたい何を考えておいでです？　わたくしは鳥天狗なのですよ。それを承知なのですか？」

向かい合つた姫は悠揚としてほほ笑んだ。

「翔一さまは、なんだか他人とは思えませぬ。しかしと太つて、なんだか狸の殿御のように思えます。それに、そのお眼鏡、それもなんだか狸に似ております。鳥天狗ではのうて、狸天狗と申すべき」

どうやら褒め言葉のつもりらしい狸姫の言葉に、翔一は愕然たる衝撃を受けていた。

「わたくしが……狸に似ている……！」

ちよん、と狸姫は翔一の頬を指で突いた。ふに、と指先が肉に食い込む。

「可愛い……」

無二の好物料理を前にしたかのように、狸姫は笑った。

翔一は反射的に、狸姫の手を振り払った。

「わたくしは狸では御座いませぬ！　鳥天狗ですぞ！」

憤然として立ち上がったが、姫はまるで堪えず、けらけら、こうふうと笑い転げていた。

「それ、そのように怒る所が、ますます愛おしく思えます。わたくし、翔一さまが好きになつてまいりましたわ！」

「ほんほんと敷かれている布団を叩き、腰をにじらせた。

「さあ、これにお寝みになられませ。新婚初夜でいります。可愛がつて下さいませね」

「ば、馬鹿な……狸と同衾するなど……」

呆然となつて、翔一に姫は厳しい声を掛けた。

「お寝すみにならせませーー。さあ、布団に、わたくしと一緒に横になるのです！」

姫はいかにも他人に命令し慣れている様子で、高飛車な威厳に翔一は、つい従つてしまつていた。

急いで布団に潜り込むと、姫がするりと横に身体を滑らせてきた。

部屋の隅の灯明皿に、姫は顔を持ち上げ、「ふーっ」と鼻息を吹きかけた。優に一間ほど離れているのに、姫の息は届いて、あつさり灯明皿の灯心は一息で消されてしまつた。鼻息の勢いに翔一はぞつとなつていた。

横になつた翔一の腕に、姫が腕を絡ませてくる。姫の毛皮が翔一の腕に触れた。

肩に姫の顎が触れてくる。

くすくすと姫は笑つていた。

「なにを、かちこちに固まつていいのです。わたくしは翔一さまを取つて食おうとしているのではありませんよ」

ううーん、と狸姫は欠伸をする。

やがて寝息が聞こえてきた。眠つたのだろうか？

朝が明けるまで、翔一はまんじりともせず、ただ暗い天井を見上げて いるだけであった。

「ぐつぐつ、と腹の虫が鳴いている。

空腹で目が回りそうだ。

皿の前に出されてるのは、相も変わらず翔一の皿には下下の下手物げげもの料理の数々である。

宴会場では翔一と狸姫が向かい合わせに朝食の席についていた。姫は百足や、蚯蚓、芋虫、蜥蜴、蛇などの見るも気色の悪い下手料理を盛んにぱくつき、咀嚼している。ぐつぐつ狸と二つのは怖ろしいほどの健啖家であるようだ。

姫は顔を上げ、翔一の顔を見つめ、鼻先に皺を寄せた。

「どうしたのです、翔一さま。あまり食が進まないようではござりますね」

「あ……」

翔一は力なく返事をした。

姫は立ち上がり、翔一の横に座った。

「そのように食が細いと、身体に毒でござりますよー。ぐ、わたくしが食べさせてあげましょ。あーん、して御覧なさい」

翔一はぶるぶるつ、と首を振つて後じさりした。鼻先に狸姫が箸で掴んだ蝗の佃煮が、ぶらんと揺れている。

「け……結構でござります。わたくし、食欲がないのですー。」

「翔一さまー！」

姫はぐっと目に力をいれ、翔一を睨んだ。

「あなたは、わたくしの婿になつたのです！ 婿殿は、嫁の言つことを聞くものです！ よろしい、それなら、わたくしにも考えがります。みなの者ー！」

姫が叫ぶと、どしゃどしゃと足音を立て、狸たちが入つてくる。姫は狸たちに命令した。

「者供、翔一さまに何が何でも食事をさせるのですー。あ、翔一さまの手足を押さえなさいー！」

味覚

悲鳴を上げる間もあれば「いや、翔一は一斉に飛び掛ってきた狸たちに無理やり手足を押さえ込まれてしまった。

誰かが鼻の穴を押さえ、苦しげに翔一は、ぱかっと口を開いた。

すかわらず、即座に口の中に狸姫が箸で掴んだ蝗の佃煮が押し込まれる。

必死に吐き出せりとするが、別の手が翔一の口を閉じられ、むしやむしゃと強制的に咀嚼させる。

「うへんー！

とつとつ翔一は、蝗の佃煮を飲み込んでしまった。

眼鏡の奥の翔一の目が見開かれた。

ペリり、と舌先で嘴の周りに残った佃煮の汁を舐め取る。

「これは……」

その顔を覗きこんだ狸姫が顔を綻ばせた。翔一の手足を押さえ込んだ狸たちの手が緩む。

翔一は、起き上がった。

目の前に並べられている料理の皿を見つめている。手が箸を取り、芋虫の油炒めを摘む。口の中に放り込み、咀嚼する。柔らかな芋虫の肉が、口の中で踊る。

「美味しい……」

ぱつり、と翔一は呟いた。
姫は大きく頷いた。

「お口に合いましたか！ よろしう御座いました！」
「うん」と頷いた翔一は、今度は自分から皿の前の料理に箸を伸ばした。

次から次へと口に放り込む。

こんな美味な料理、ついぞ食べた記憶がなかつたと思つていた。

翔一の箸が止まらない。

食べても食べても、底なしの食欲が湧いてくるようで、翔一は皿の前の料理を口に運んでいた。

箸を動かしているのは翔一が、たった一人だけである。狸姫と、その他の狸たちは、そんな翔一をじっと見つめている。

ふと翔一は食べるのをやめ、顔を上げた。見つめている狸姫の視線が気になつてどうにも居心地が悪い。

ふつと翔一は照れ笑いを浮かべた。

「どうしたのです？ 姉さまは、あまり召し上がるな」ようですが？」

くつくつと狸姫は口に手をやり、笑いをこらえる。

「まあ、まるつきり先ほどどの、わたくしの台詞ではありますか！」

それにしてお食へになられましたね」

翔一は恥ずかしくなつた。

「はあ、虫料理が、このように皿のものだと知りませんでした。すっかり、『駄走になつて……』

と、翔一の手から、ぽとりと箸が落ちた。

狸姫は翔一の顔を窺うような目つきになつた。

「どうしたのですか、翔一殿。『気分はいかがですか？』

「い、いえ……ちよつとびまかつ……」

言いかけた翔一は、がたがたと震え出していた。戦慄が背筋から首筋へと駆け上る。

まるで着物の背中に氷柱を入れられたように寒気がへばりついていた。

「う、う、う……」

翔一は自分の身体を抱きしめるように両腕を胸の前で重ねた。狸姫が声を掛ける。

「寒いですか？」

頷こうとした翔一は、目を大きく見開いた。

今度は体の芯から熱いものが、ぐわんぐわんと込み上げてくる。かつ、とばかりに灼熱の炎が、翔一の胃の腑を焼き焦がそうとしているようだ。

「あ、熱い！」

悲鳴を上げた。狸姫は頷いた。

「今度は、熱いと申されるのですね」

まわりの狸たちと示し合わせるように頷きあう。

「う、これは……？」

翔一は、どた、と横倒しに倒れこんだ。とても真っ直ぐ座つてはいられない。床に顔をすりつけるようにして、翔一の身体は勝手に痙攣を始めていた。

「た、助けて……わたしは、どうなったのです……？」
すつ、と狸姫は立ち上がり、近寄ると翔一の顔を覗きこんだ。その表情は不気味なほど静かで、冷静だ。

ぐくん、ぐくんと翔一の心臓は早鐘のように鼓動している。全身の血流が逆流するかのような感覚に、翔一は恐怖に駆られていた。どつと翔一の全身から滝のような汗が噴き出した。

「姫さま……わたくしに何を……まさか、これは毒？」

狸姫はゆっくつと首を振った。

「まさか、嬪殿にそのようなものを振舞はずがありませぬ。唯ちよつと、お召し上がりになつた料理に少しあかり、男女の睦みごとに効き田シルデナフィルのある、西地那非バイアグラ、別名を威而鋼と申す薬物を入れただけ……思つたより効き田があつたようですね」

むうふふふ……。

狸姫の笑い声が聞こえている。

その声を耳にしながら、翔一の意識は遠ざかっていった。

時太郎の目の前を、ちゅるちゅると小さな豆狸まめだが小さな手足を必死に動かして先導している。

狸穴への道案内なのだ。

時折、ちらちらと振り返り、時太郎とお花がちゃんと従ってきているか、確かめている。

時太郎は背後をふり返った。
立ち込める霧に、狸御殿にじが滲んだ影となつて見えている。天守閣の辺りに、翔一は囚われているはずだ。
なんとしても媚殿を連れ帰ると、時太郎は誓つていた。

しばらく、てくてく歩いていると、霧が晴れ渡り、片側の切り立つた崖に朝日が当たつて辺り一帯は金色に輝いた。

「狸穴の媚殿つて、どんな狸なの？　あんた、会つたこと、あるの？」

唯せかせか歩いているだけのことに退屈したのか、お花が先を走る豆狸に話しかけた。

「豆狸は甲高い声で返事をする。

「会つたことは、まだ一度も御座いませぬ。それがしのよつな身分の低い狸には、過ぎたことで御座います。ただ、噂ではとてもお優しい性格のお方だそうで、狸穴に住む知り合いの話では、狸姫さまはお幸せ者じやと噂されておりました」

ふーん、とばかりにお花は頷いた。豆狸は話し好きなのか、言葉

を重ねる。

「もともと狸御殿と、狸穴に住む狸たちは犬猿の仲で御座いました。何十年か前のこと、刑部狸さまに反旗を翻した一団が徒党を組んで御殿を出奔し、狸穴に住み着いたのが始まりで御座います。以来、狸御殿と狸穴の狸たちは没交渉のままだったのですが、近年これではいかぬ、と刑部狸さまが狸穴との関係修復を提案され、それで今度の婚儀が決まったので御座います」

「へーえ、とお花は眼を丸くした。

「それじゃ、狸穴の殿御が来ないとなると、大変な事態なのね」

「豆狸は鹿爪らしく頷いて見せた。

「はい、この婚儀は、どちらにとつても是非とも成功させなくてはならぬ、と大変な意気込みで御座いました……それが今度のことのような仕儀になつて……」

時太郎は話に加わった。

「それで、なんで狸御殿から、そいつらが狸穴とやらに移り住んだんだい？ 反旗を翻したつて、どうこう意味？」

豆狸は頭を振った。

「よくは判りませぬ。ただ、自由な生き方をしたい、と言つのが理由だつたそうで。なんのかんの言つても、刑部狸さまは配下の勝手な振る舞いには毅然とした態度をお示しになれますから、若い狸たちにはそれが不満だつたのかもしれません」

話しているうち、豆狸の足取りが乱れてきた。ぜいぜい、はあはあと息が切れ、桃色の舌を口の端から垂らしてくる。お花は心配そうに声を掛けた。

「あんた、疲れているんじゃない？」

豆狸は立ち止まり、息を入れた。

「は……はい、このよひに小さな身体ですので、あなたがたの歩きに合わせると、ちと、應えまする……」

お花は笑つた。

「早く言えばここの一... それじゃ、あたしの肩にでも乗つかれば？」

屈みこんで手の平を上にした。豆狸はぴょん、と飛び上がってお花の手の平に落ち着いた。その豆狸を、お花は肩に移した。

「あんたは、ここから道を教えてくれればいいよ」

「恐縮で御座います」

豆狸はお花の肩でせつと息をついた。再び歩き出す。

頂上

やがて豆狸まめだは、声を上げた。

「ここで御座まゐだります！」

立ち止まると、崖に階段が刻まれている。階段はくねくねと曲がりくねりながら、崖の上へと続いている。

「ここを登るのか？」

「さようで御座まゐだります。この上まゐだ、狸穴まみあなへと続く道が御座まゐだります」

豆狸の言葉に、お花は呆れた。

「まだ着かないの？　ずいぶん、遠いのね」

「ともかく、登つて見よまづぜ」

時太郎は先頭に立つて階段を登り始めた。

階段は岩壁を直に鑿のなどで刻まれたものらしく、不揃いで時々途切れたり、妙な間隔が空いたりしている。

幅は狭く、今にも転げ落ちそうで、気の弱いものなら登攀を諦めてしまいそうだ。

ようやく頂上に着くと、そこには小さな小屋が掛かっていた。

小屋の前には長椅子があり、そこには一匹の狸が傲然と腰を下ろし、煙管をぶか一り、ぶかりと悠長に吹かしている。

狸は、じりりと時太郎とお花の肩に乗つている豆狸を見て口を開いた。

「何のようだね？　お前さんの肩に乗つているのは、狸御殿の豆狸のようだが」

お花が話しかけた。

「こんなちわ！ あたしたち、狸穴へ行きたいんだけど、ここから行けるのかしら？」

狸は、ふむ、と鷹揚に頷いた。

「狸穴へ行きたいのか。それなら、それに乗りな。その豆狸なら、道を知つているはず」

手にした煙管の先を振つて指し示す。

そこには四つの車輪を持つた奇妙な台が置かれていた。車輪の下には鉄製らしき軌条レールが一本、長々と視線の届く限り先にと続いている。台の上には棒の上に横に渡された把手ハンドルがついている。

「これは……なんだい？」

時太郎の質問に狸は答えた。

「簡便手押式台車だ！ そいつに乗れば、真っ直ぐ狸穴に着ける。行きは下り坂だから、楽だぜ。ただし、帰りは相当に辛いがね」

恐る恐る二人は簡便手押式台車の台に乗った。目の前の把手を掴む。

時太郎は、ぐいっ、と把手を押し下げた。

がくん、と微かな衝撃があり、簡便手押式台車は、「じとじと」と音を立て動き出した。

「あはっ！」

時太郎は思わず声を上げていた。

「面白そうだ！」

ぐいっ、ぐいっと時太郎とお花は把手を動かした。時太郎が力を込めるたび、車はぐんぐんと速度を上げる。

「ちょっと……時太郎、面白がるのはいいけど、押さえてよ！ 危ないわ！」

お花の言葉にも、時太郎は夢中になつて把手を動かしている。動かすたび、簡便手押式台車は速度を上げた。

びゅうびゅうと吹き付ける風が物凄い。

鉄路は森の中を進んでいた。

やがて坂道は平坦なところに代わり、辺りは広々とした草原になる。

遙か彼方に、きらり、きらりとした輝きが見えてきた。

「なんだらう」

時太郎は伸び上がって、そちらを見透かす。
お花が鼻をくんくんとさせた。

「潮の匂いみたい……」

「潮だつて？」

時太郎はお花の肩に止まっている豆狸を見つめた。豆狸は頷いた。
「はい、海が近いのです。狸穴は海の側にあるのです」

「海……！」

時太郎は声を弾ませた。
海なんて初めて見る！

広がる海原を見て、時太郎は叫んだ。

「広い……！ なんて広いんだ！」

簡便手押式台車は海岸べりを真っ直ぐ進んでいた。

衝突

真っ青な海原から、白い波が砂浜へと打ち寄せる。砂浜の砂はほとんど白といつてもいいほどどの色で、なにか特別なものが含まれているのか、時折きらきらと光を反射している。

「狸穴、つていうから、どうかの洞窟に住んでいるものとばかり思つてたわ！」

お花が感想を言つと、豆狸は髪をぴくぴくさせた。なんだか「してやつたり！」という表情である。

と、豆狸は鉄路の向こうを見やつて緊張した表情になつた。

「時太郎さん、終点が近づいてきました。制動装置を！」
「制動装置つて、なんだい？」
「簡便手押式台車を停めるんです！ ほら、そこの棍棒^{スバ}を引いてつ！」

豆狸の声は悲鳴に近くなつていた。

終点が見えてくる。鉄路の先に車止めがある。出発したときと同じような小屋があり、そこから数匹の狸が飛び出してきた。明らかに慌てている。手を振り回し、なにか叫んでいる。

「停めろつー ぶつかるつー！」

狸たちの切迫した口調に、時太郎もようやく事の重大さを認識した。

棍棒に飛びつく。

ぐいっ、とばかりに力いっぱい引き寄せた。

“わわわわわわこ～っ！

軋むような音を立て、制動装置が利きはじめる。車輪から火花が散り、なにか油が燃えるような、厭な匂いが漂つた。

お花も時太郎と一緒に棒を引き寄せた。

二人と豆狸は、ぐんぐん近づいてくる車止めを見つめていた。着実に近づいてくる。速度は、あまり下がっていない。

そのまま、ぶつかると……。

時太郎は目をいっぱいに見開いていたが、お花は恐怖のあまり目を閉じている。

そして、ついに……！

がくんっ！

簡便手押式台車は車止めに衝突してしまった！ 衝撃で、台車は横倒しになり、時太郎とお花は投げ出される。

ぐるぐると空が回り、時太郎は後頭部を何かに打ち付けていた。

ぱつ、と田の前に星が飛び、あとは何も判らなくなつた……。

?
声?

闇の中、時太郎は？声？に耳を傾けていた。
その？声？は奇妙だった。

確かに聞こえているのに、聞こえていない。耳を澄ますと、ふつと遠ざかり、意識を逸らすと、また聞こえてくる。
それは、苛立たしいほど捉えどころがなかつた。何かを単調に咳き、延々と報告を続けていくようである。

いつたい何を咳いでいるのだろう？

どうやら？声？は、一つではなさそうである。幾つかの？声？が交錯し、それらが一つの？声？に収斂していく。

じつと聞いてくるうちに時太郎は、それらの？声？の内容が判つたと思つた。

いや、その時は確かに、そう思えたのだ。

驚愕が時太郎を揺り動かす。

しかし、その感情は一瞬にして失望に変わつた。もう、どこからも、その？声？は聞こえない。

時太郎は再び闇にとり残されていた。

「こいつらかい、簡便手押式台車を台無しにしたつていうのは？」

「はい、左様で。一人は人間の小僧、もう一人の娘は、どうやら河童らしく思えます」

「田を覚ませておやり。訊ねたいことがある」

そんなやりとりが聞こえ、いきなり「ばしゃつ！」と大量の水を掛けられ、時太郎は跳ね起きた。

「うわっ！ なにしやがる……」

けほけほと咳き込み、顔を上げると巨大な狸の顔と向き合ついた。

「お前かい、あたしの大事な簡便手押式台車を壊したのは！」

島田鬚に、派手な色合いの打掛を羽織つている。胸元には巨大な双つの乳房が突き出し、どうやら、この狸は牝らしい。

それにして、巨大である。相撲取りにも、こんな大きさの人間はいまい。狸御殿の刑部狸と、いい勝負だ。胡坐をかき、どつてりと座つている姿は、ちょっとした小山のようである。

きょろきょろと辺りを見回すと、隣にお花が田を覚ましたところで、ぼんやりとした表情を時太郎に向けていた。

簡便手押式台車の鉄路も見える。小屋の近くに、時太郎とお花の二人は寝かされていたようだ。

周囲には、先ほどの巨大な狸とともに、数匹の狸たちが取り囲む

ように並んでいる。その場には明白な敵意が満ちていた。
皆いすれも手に竹槍を持ち、油断無く身構えている。

狸たちは

五郎狸

「おーーー。」

さつきの牝狸が声を上げた。

「あたしが質問しているんだ！ 答えないつもりかえ？」

表情には怒りが差し上っている。眉が寄せられ、鼻筋に皺ができる。

ぐつ、と時太郎は鳩尾に力を入れた。

「ああ、悪かった。つい、面白くて速度を上げすぎた。あれを壊すつもりは、一切なかつたんだ。御免よ」

「つい面白くて……だつてえ！」

狸の声は甲高くなつた。

「おみつ御前さま。ま、ここは手前にお任せくださいされ」
物柔らかな口調で一匹の狸がしゃしゃり出た。小柄であるがでつ
ふりと肥満し、眉が太い。背中に蓑笠をしょつている。

おみつ御前と呼ばれた牝狸は、ふんぞりかえつて頷いた。

「よからひ、五郎狸。お前に任せる」

先ほどの五郎狸と呼ばれた狸が時太郎に顔を向けた。

「さて、話を聞かせてもらおうか。まず、あんたらの名前だが
おお、わしの名前を名乗るのが、まだだつたな。わしは五郎狸と申
して、この狸穴で色々な面倒を引き受けたる役目を仰せつかつてゐる。

ま、何でも話してくれれば、わしが悪いよひよはせぬ

「この五郎狸の言葉には嘘がないようだ。時太郎には相手が嘘を言つてゐるか、どうか瞬時に判る。

「おれは、時太郎。河童淵から來た」

「あたしは、お花。時太郎と同じで、河童淵から來たの」

五郎狸は「ふむふむ」と忙しく頭を動かした。

「その河童淵から遠路はるばる、なんでまた、この狸穴にやつて來たのかな？ わしの記憶が確かなら、河童淵はかなり遠いが

時太郎とお花は素早く口配せをしあつた。お花が頷き、口を開く。「ううの場合、お花のほうが話をしやすい。

お花の弁解

「実は、わたしたちの仲間が狸御殿に引き止められてしまって。その仲間を取り返すには、この狸穴まみあなと狸御殿の間で進められていたご婚儀を元通りにしなくてはならないことになつたんです。この狸穴には、狸御殿のお姫さまに婿入りなさるお方がいらっしゃるんでしょう？」

すらすらとお花は話した。しかし、翔一が狸御殿のお姫さまに無理やり結婚を迫られたことは伏せている。狸御殿といつ言葉に、背後で控えているおみつ御前の目が、ぎらりと光つた。

お花の言葉に、五郎狸は目を丸くした。

「狸御殿から！ ふーむ、確かにこの婚儀の話しさは進められておつたが、承知のよしに破算になつてしまつた。おぬしらの仲間には悪いが、千代吉ブリスさまは御殿にはまいらぬよ。」

「その、千代吉エンブレスさま、てのが、お婿さん？」

お花の質問に、五郎狸は大きく頷く。

「左様じや。そこのおみつ御前さまの一粒種エンドレスでな。さう言えば、おみつ御前さまは、この狸穴を治めておられる女帝エンドレスで、息子の千代吉ブリスさまは若様、といつことになる」

お花は身を乗り出した。

「それで、どうしてこの婚儀の話が駄目になつちやつたの？ 千代吉さん、お婿さんになるのは厭だつて言つたの？」

五郎狸は首を振つた。

「いや、そのよつな」ことはないが……」

言葉を濁す。

すると、これまで黙っていたおみつ御前が口を開いた。

「あたしが話を取りやめたの。あの刑部狸には、つぐづくがっかりだよ。おおかた老いぼれて、意氣地がなくなつたんだからうね。せつかくのあたしの提案を、にべなく断つてくるんだから。だからあたしゃ、この婚儀も」破算にしたの。」

恥々しげに黙り、太い腕を胸の前に組んだ。それを見て、五郎狸は困ったような表情になる。おずおずとおみつ御前に向かい合い、口を開いた。

「しかし、御前さま。この婚儀は狸穴と狸御殿の間を取り持つ大事な縁と申せましょ。あのよつな」と取りやめにすること、惜しそうな話で御座こます」

「うるわこつー！ もう決めたことだよ」

叫ぶと、じろじろ五郎狸を睨み据える。恐れ入った五郎狸は首を竦め、黙り込んだ。

怒り

おみつ御前は、時太郎たちに向き直った。

「あんたら、狸御殿から来たとお言いだね。間違いないね？」

念を押すおみつ御前に対して、時太郎とお花は頷いた。

「それで、目的は、千代吉の婿入りの話を元通りにするつてことかい？」

再び二人は、こくんと頷く。

おみつ御前は、にやりと笑いを浮かべた。微かに開いた口許から、白い歯が覗く。

「嘘だね」

その言葉に時太郎はかつ、となつた。

「嘘なもんか！」

「いいや、嘘だ。お前ら、狸御殿の刑部狸から頼まれ、この狸穴に^{スパイ}諜者として入り込むため、やって来たのさ！」

お花は、ぽかんと口を開け、囁くよつに呟く。

「ど、どひして、そんな解釈になるの？ あたしたちが諜者だなんて」

おみつ御前は立ち上がった。立ち上ると、さうに巨大さが強調される。

「報告ではお前たち、狸御殿の^{まあだ}豆狸を伴っていた、とある。しかし、その豆狸、どこに居るんだい？ 姿が見えないじゃないか！」

時太郎とお花は顔を見合させて「あつ！」と叫び合つた。

やうだ、すっかり忘れていたが、豆狸の姿が見えない。いつたい、
どこで何をしているのか？

「ここにつらをふん縛つて閉じ込めておきな！ なんとしても白状させ
せてやる。いい機会だ、この際、狸御殿の刑部狸に眼にもの見せて
やるや……」

その声に周りの狸たちが手にした竹槍をざりつゝと水平に構え、時
太郎とお花を取り囲んだ。

「抵抗するな！ 妙な真似をすると、ぶつすり行くぜー！」

竹槍の先で歩くよつ指示する。

時太郎は思つていた。

「一度あることは二度ある。二度あることは四度ある。四度ある」
とは果てしなく無制限にある……。

「冗談じゃない！」

立ち回り

ぐつと時太郎は、突き出された槍の穂先を握りしめた。はつ、と構えた狸が驚愕の表情になる。

そのまま槍を時太郎は、ぐいっ、と手元に引き寄せた。

おつとど、と狸は^{たたら}踏鞴を踏みかけて、辛うじて足を踏ん張る。時

太郎が逆に押し返すと

「わっ！」と叫んで仰け反つてしまふ。時太郎は力任せに竹槍を奪い取つた。

「野郎……」

狸たちは怒りの形相になつて、一斉に突進してきた。

ぶーん、と音を立て時太郎は奪い取つた竹槍を振り回す。びしつ、びしつと狸たちの槍が、時太郎が振り回した竹槍の先で叩き落される。

「何をしているんだい！ そんな小僧一人に、手間取りやがつて……」

…

おみつ御前が怒鳴る。

時太郎はお花を振り返り、叫んだ。

「お花、従^ついてこいっ！」

その声に、お花は弾かれたように走り出した。

たたた……、と時太郎は、おみつ御前に向かつて走り出す。槍を前方に突き出している。ただし穂先は後方に前後逆に持つている。

とん、と時太郎は竹槍を地面に突き立てた。ぐつ、と力を入れると、竹槍は弓のよう^{しな}に撓る。その反動で、時太郎の身体は宙に持ち上がった。

おみつ御前はぽかんと目を見開いた。その顔に、時太郎の両足の踵がめり込む。

ぐあつ、とおみつ御前の悲鳴が上がる。「御前！」と五郎狸の叫び声。

叫び声

「御前！」と五郎狸の叫び声。
よひひ、とおみつ御前は一步、たたら踏鞴を踏む。ぐらり、と上体が泳
いだ。

たつ、と時太郎は地面に降り立つた。

「こいつ……」

おみつ御前は顔を上げた。両手を一杯に見開き、歯を食い縛る。
怒りに目が「らん」と光っている。

「うおおおつ！」と咆哮し、おみつ御前の右腕が振り上げられた。
横殴りに時太郎の顔を狙つてくる。

それをひょい、と頭を下げ、躊かわ躇すと、時太郎はおみつ御前の懷に
飛び込んだ。

相手の上膊部を取り、足を飛ばして内股を狙う。ぐつと力まかせ
に踏ん張ると、どつてんどうとばかりに、おみつ御前はひっくり返
つた。

「逃げるぞつ！」

時太郎はお花に声を掛けた。お花は素早く頷く。一人は全速力で
逃げ出した。

と、五郎狸が落ちている竹槍を拾い、地面すれすれを狙つて投げ
た。

竹槍が時太郎の足に絡まつた。そのまま「わつ！」と、うつ伏せ

に倒れこんでしまつ。すぐ後ろを走っていたお花も時太郎の倒れた
身体に躊躇、ひっくり返つた。

倒れこんだ二人に狸たちが襲い掛かつてくる。無数の狸にのしか
かられ、時太郎は息もできない。

たちまち地面に押しつけられ、身動きもできなくなつた。

「ぬうう……」

おみつ御前が、のしのしと近づいてきた。顔は地面に倒れたとき
ついたのか、べつたりと泥が付着している。頭の島田鬚は崩れ、ざ
んばらになつていた。

「舐めやがつて……。なんて小僧だい！」

怒りに声が震えている。

「連れておいきつ！ いいかい、絶対に逃がすんじやないよつ！」

小屋

波音が聞こえている。

海岸近くの崖沿いに粗末な小屋が並んでいて、その一つに時太郎とお花は全身を縄でぐるぐる巻きにされ、押し込められた。

小屋の中には漁の道具が乱雑に置かれている。おそらく狸穴狸は海で漁をして生活しているのだろう。小屋に窓はないが、粗雑な造りのせいか、羽目板から口差しが内部にこぼれ、それほどの暗さではない。

もだもぞと身動きをして、お花は上半身を起こした。背中側に両手が縛られ、両足の先も同様なので、起き上がるだけで一苦労だ。

時太郎は背中を見せて横たわっている。
お花は恨めしげに時太郎を見た。

「どうすんのよ、時太郎。 あんたのせいよ

「つるせえなあ……」

背中を見せたまま時太郎は不機嫌に答えた。

どんどんどんどん、と羽目板が叩かれた。

「お前たち、黙つていろ！」

小屋の外に見張りが立っているのだ。

すりすりと腰を動かしてお花は時太郎に近づいた。聞こえないよう【水話】を使う。時太郎は【水話】を発することはできないが、聞き取ることはできる。

ねえ、これが、ひざひざするの、って聞いてるのよー。逃げ出
すつもり、あんの？

ぐぬりと時太郎はお花に顔を向けた。

「こんな状態で、どうやって逃げ出すってんだ？」

見張りを気にして囁き声である。

お花は背中を見せた。背中側に縛られた両手の指をひらひらさせ
る。

指は動くから、縄目をほどけば、なんとかなるんじゃない?
ともかく、あたし、こんなところに
閉じ込められているのは、まっぴら御免だわ。

「よし……」

時太郎も身動きした。

お互に背中を押し付けあつよつとして、手首のこましめをせんべくため、指先を動かす。

暫く沈黙の時間が流れる。

ふつとお花と時太郎は同時に溜息をついた。縄田はきつく縛られ、どうやつても、ほじくことはできない。

お花と時太郎は諦めて小屋の羽田板に背中をもたれさせた。

お花が【水話】で話し掛ける。

それにしても、どうしておみつ御前といつ母親は、『婚儀に反対したのかしら？

時太郎はお花の顔を見て「どうこう」とだい？」と口だけを動かして尋ねた。

なんだか、あの母親が刑部狸に何か提案した、と言つてたわね。それが解決すれば、千代吉さんつてお嬢さんを連れて行けるんじゃないの？

時太郎は頷いた。しかし、どうすればいいのだ？と、小屋の外で見張りが身じろぎする気配がする。

「坊っちゃん、ここへ何の御用です？」

「母上が見張りをするお前のため、これを持っていけど仰るのできました……」

心細い返事が聞こえる。見張りの声が嬉しげに弾んだ。

「これは、酒では御座しませぬか！ 有り難い」とで……

「ここに置いておきますから、どうぞ」存分に……それに、摘みも

……

見張りが座り込む気配がした。

ぐびぐびと喉を鳴らす。暫く喉を鳴らし、舌鼓を打つ音が続いた。

「…………やつぱり御前さまは気が利くぜ…………」

そのひが、欠伸が聞こえた。どうと横倒しになる音がして、ぐうぐうとこり軽。

とんとんと小屋の戸を叩く音に、時太郎とお花は顔を見合わせた。

「誰だ？」

時太郎は鋭く声を掛けた。

「時太郎さまと、お花さまで御座いますね？ わたくし、おみつ御前の息子で千代吉と申します」

時太郎は、藻搔もがくようにして小屋の羽目板の隙間に目を押し当てる。隙間から微かに外の景色が目に入る。見張りの狸の尻が目に入った。角度が悪く、戸の前にいるであらう相手は見えない。

「見張りは酒に混ぜた眠り薬で朝まで目が覚めません。今のうちにわたくしがお二人をお逃がし申し上げます」

千代吉と名乗った相手の言葉は、せかせかと焦っている。

「お早く！ 見つかる前に……」

時太郎は羽目板に顔を押し付け答えた。

「判つた、頼む！」

かたん、と戸の門かんぬきを外す音がして、からりと引き戸が開けられた。

そこに立っていた狸の姿に、時太郎とお花は吃驚した。

鉄の茶釜に手足と顔、尻尾が生えている。茶釜の横腹には「文」と「福」という文字が浮き彫りになっている。

「あんたが、千代吉さん？」

お花の問い掛けに茶釜狸は頷いた。

「はい、わたくしが、千代吉と申します」

驚く時太郎とお花に千代吉は言葉を重ねた。

「わたくし、文福茶釜狸なのです」

文福茶釜狸の千代吉は小屋の中に入ると、小刀を使って時太郎と

お花の縄田を「ぶちぶち」と切つていった。

きつく縛られていたので、一人は血行を取り戻すため、暫く手足を擦る。その間にも千代吉は背後を振り返り、苛々と足踏みをしている。誰かに見咎められないかと気が気でないようだ。

「それでは、まいりましょ」

外へ出ようとすると千代吉を、時太郎が呼び止めた。

「待て、どうしておれたちを助けてくれるんだ？」

「わたくし、母の計画には反対なのです。このままでは狸穴と狸御殿に戦いが起きることになります。それを防がなくてはなりません！」

お花が口を開いた。

「その計画つて、なに？」

千代吉は瞳を飲み込み、答えた。

「人間界への征服計画でござります」

千代吉が案内したのは、崖沿いの松林だった。海側の強い風が吹きつけるのか、松林はみな同じ方向に枝を伸ばし、地面に根っこを這わせている。先に立ちながらも、道々で千代吉は説明を続けた。

「まったく、お母上のお考えは、わたくしには無謀としか思えませぬ。人間への攻撃など、自殺行為です！ わたくしは何度もそんな計画はお止めになるよう、申し上げたのですが、いつかな耳を貸そうとは致しませぬ。こうなつては、仕方がありませぬ。わたくしが計画の阻止を実行するより、他に道はないのです。ですからお二人に、わたくしに協力して貰いたいのです」

千代吉の後に続きながら時太郎は口を開いた。

「その、計画って、どんなものなんだい？」

「武器で御座います！ 最近、新たな武器を母上は調達したので御座います。それで人間への攻撃などといつ考えが、頭に浮かんだので御座いましょう」

その時、背後から「ピーッ」という鋭い笛の音が聞こえてきた。千代吉は「はっ！」と顔を振り向かせる。

「お一人が逃げ出したのが、露見したようで御座います。お急ぎ下さい！」

口を開くことなく、三人は黙つて足を速める。時太郎は緊張した。

「あの二人、逃げたぞーっ！」

「まだ遠くへは行つてはおるまい……」

「見つけるのだ！ このことが御前に知れたら、どんなお叱りを受

けるか！」

遠くから狸たちの慌てて いる声が聞こえている。

待て、と時太郎は一同を手真似で抑えた。こんな場合、下手に動くのは却つて危険だ。それが判つたのか、お花も千代吉も息を潜め、身動きもしない。

時太郎は狸の動きをよく聞き取ろうと神経を尖らせた。弾んだ息を静め、気息を整える。

と

時太郎は目を見開いた。

なんだ、これは？

今まで感じた経験のない、奇妙な感覚が時太郎に襲い掛かる。ざわざわという風に靡く松林の枝葉が掠れる音。遠くから聞こえる岩に碎ける波音。きらきらきら……と蟋蟀^{キリギリス}が音を立て、どこかへ飛んでいく。空を見上げると、低く垂れ込める雲がゆつくりと風に流されていく。その動きにも形容しがたい音が聞き取れる。

あらゆるものが、声？を上げていた。時太郎は、この超常感覚に圧倒された。

「わああつ！」

堪らず時太郎は両耳を押さえ、蹲る。

「時太郎！ と、お花が心配そうな声を上げる。

冷たい恐怖が時太郎の胸に込み上げて来る。

なんだこれは！ おれは気が狂つたのか……？

夕闇が辺りを包んでいる。
ようやく時太郎は顔を擧げ、立ち上がった。額から顎へかけ、ね
つとりとした汗が滴つている。

「大丈夫？」

お花の声に軽く頷く。

なんとか、あの衝撃は乗り切つたようだ。

必死に耐えたあの恐怖の刻は過ぎ去り、時太郎は平常心を取り戻
していた。しかし？声？は消え去つてはいない。単に時太郎がこの
状態を受け入れただけである。

「千代吉、案内してくれ」

時太郎の言葉に千代吉は「はっ」と向き直つた。

「宜しいので御座いますか？」

時太郎は無言で頷いた。

とととと……と、茶釜から突き出している四肢を忙しく動かして、
千代吉は歩き出す。お花が感心したような声を上げた。

「そんな重いものを担いでいて、よくそんなに早く歩けるわねえ」
「そうで御座いますか？ わたくし、生まれた時からこの姿で御座
いまして、慣れているのでしょうか、重いとは思つたことも御座い
ません」

程なく、前方に明かりが見えてきた。

明かりは、松林の中に建つてある土蔵造りの建物から洩れていた。

どつしりとした造りの、意外と大きな建物である。

土蔵の入口には竹槍を持つ狸が見張りに立っていた。所在無げ

であるが、目付きは鋭く、油断は全然していないようだ。

時太郎たちは茂みに隠れている。千代吉は一人に囁いた。

「あの建物の中に、狸穴の武器があるのです」

「見張りがいるわね」

お花の言葉に千代吉は頷いた。

「ええ、お一人を助けたときのような手は使えません。この建物を見張る狸は、母上が特に選んだ精銳ですから。しかし裏側に回れば、わたくしだけが知っている裏口があるはずです。そこから中へ入りましょ」

案内しようとした歩き出した千代吉は、時太郎の様子に立ち止まつた。

「あの……時太郎さま？」

「ん……」

時太郎は、ぼんやりしていたようだ。

なぜだかひどく切迫した危機を感じてならない。ちりちりと首筋に熱いものを感じて、いても立つても居られない気分である。

なんだろう？

時太郎は内心で何度も首を捻っていた。お花は心配そうな目で時太郎を見ている。

そんな迷いを振り払い、時太郎は千代吉にきつぱりと話しかけた。

「とにかく中へ案内してくれ」

千代吉は頷き、歩き出した。ちよこちよこと手足を動かして先導

する。

時太郎とお花も四つん這いになつて後に続いた。見張りの田の届かない場所を選び、そろそろと回り込む。よつやく一行は、土蔵の裏側へと出た。

裏側には粗末な小屋が土蔵の壁に接するよつにして建てられている。その小屋の戸を開いて、千代吉は一人を案内した。中に入つて千代吉はぼつと溜息をついた。内部には「いたご」と荷物が山積みになつていて、埃っぽい。

「なんとか見つからず、ここまで来られました。実は、この小屋は土蔵と繋がつているのですが、今は誰も使つていないので、土蔵に入る入口があることは皆、忘れ果ててあります。これがそうです」

荷物の間に細い隙間がある。体を捻らないと入り込めないが、確かに入口のようだ。この荷物が田隠しになつて、そこに入口があることは判らなくなつていて、いるのだろう。

時太郎は先頭に立つて隙間に身体を捻じ込んだ。土蔵の中に入るとい、そこもまた荷物に占領されている。内部を覗き込んだ時太郎は「はつ！」と緊張した。

誰か居る……。

後から入つてこよつとしているお花に振り向き、囁きかける。

「待て！ 先客が居るぜ」

「本当？」

お花は時太郎の肩越しに覗き込んだ。驚きのあまり、声を立てそうになるのを慌てて自分の手で口を押さえた。

「あれつて……」

「うん」と時太郎は頷いた。土蔵の中に居たのは何と、おみつ御前
だった。

土蔵の中に居るのは、おみつ御前だけではなかつた。おみつ御前の目の前に、ひょろ長い異相の人間が立つていた。

時太郎は、それが南蛮人ではないか、と思った。

襞飾りのある襟、身体にぴつたりとした筒袖のような上着。足下は襦袢のような生地で、爪先の反り返つた靴を履いていた。やや前屈みの姿勢で、両目が明かりに反射して、猫の目のように光つている。

南蛮人の隣には五郎狸が控えていた。五郎狸は俯き加減に、じつと押し黙つている。

時太郎は南蛮人に引き付けられていた。その姿から、とてつもない違和感が立ち昇つている。

こいつは、敵だ！

時太郎は全身で強く確信していた。なぜだか判らないが、その確信だけは時太郎の胸にずつしりと存在している。

おみつ御前が何か話している。

「それで、準備はどうなんだい？ あたしは狸御殿の刑部狸の臆病さには腹が立つていいんだよ。人間への攻撃の前に、まず狸御殿の連中を叩き潰してやりたいんだ！」

南蛮人がひそひそとした声で応える。

「準備はすでに、できております。例のものは、すぐにでも使えま

しう。ただし、扱いには厳重な注意が必要です。これを使えば、あなた様は無敵の力を得ることになる……」

言葉を切ると、南蛮人はひつそりとした笑いを浮かべる。

おみつ御前は疑り深そうに鼻を鳴らした。

「あんたはそう言うが、あたしはまだその威力を目にしているんだよ。本当にあんたの言つ通りかどうか、まだ迷っている。で、今田こそ、そいつの威力つてやつを見せてくれるんだね？」

南蛮人は頷いた。

「勿論で御座いますとも……。それでは、こちらへ」と、南蛮人は出口へ歩いていく。おみつ御前も後に続いた。

出口近くには見張りの狸は、一人が近づくとちょっと身じろぎをした。

出口近くには幾つもの箱が積み重なっている。南蛮人はその一つの箱の蓋を開けると、中から一本の棒を取り出した。棒には細い紐が伸びていた。その棒をおみつ御前に見せて説明をはじめる。

「これは、極めて危険な代物です。しかし、戦場では無敵の武器となりましょう。使いかたは簡単です」

懐から燐寸マツチを取り出し、近くの柱に擦りつけ、ぱちっと火を点ける。

その火を棒から伸びている紐に近づけると、紐はぱちぱちと音を立て燃え出した。

「素破、乱破などは目眩ましに火薬を使うそつですが、この威力はそれとは桁違いです。さあ、ご覧下さい！」

紐は半分ほどに短くなっている。

南蛮人は勢いをつけ、棒をやつとばかりに放り投げた。

棒はくるくると回りながら山の斜面を転がり落ちていく。やがて、かなりの距離のところで止まつた。ぱちぱちと紐からは、まだ煙が出ている。

その紐がすっかり燃え尽きた。

どかーん！

大音量が響き渡り、土塊つちくずがあたりに飛び散った。もくもくという煙りが立ち込め、つんとする金臭い匂いが漂う。

すっかり煙が晴れると、その場の地面は大きく抉れ、丸い大穴が開いている。

見張りの狸はすっかり腰を抜かし、地面にへたりこんでいる。

おみつ御前は呆気に取られ、目をぽかんと見開いた。五郎狸は両耳を押さえ、目をしつかりと閉じて縮こまっていた。

「いかがかな？ これを震天雷ダイナマイトと名付けました。文字通り、天を震わす雷いかづちと申せましょう……」

その時ばかりは南蛮人は得意そうな表情を見せた。

「あ、ああ……驚いた。すごい威力だね」

やつとのことで、おみつ御前は声を絞り出した。しかしその瞬間、狡猾こうくわそうな表情が浮かぶ。

「そうだね……これさえあれば、狸御殿の連中はおろか、人間たちだって、ひとたまりもないだろ？ や！ あたしや、これを使って、総ての国を征服できるんだ！」

おみつ御前は、くるりと南蛮人に向き直った。

「それで、これをと引き換えに、あんたは何を求めるつもりなんだい？」

南蛮人は首を振った。

「何も要求するつもりは御座いません。ただ、お約束して欲しいのは、この震天雷がわたくしの手から出たものであるということを隠して頂きたいのです。あくまで狸穴の狸たちが独自で発明した、といつことで押し通して頂きたい」

おみつ御前は目を細める。

「判らないねえ。いつたいどんな得があつて、あんたはあたしらに肩入れするのか……。しかも、こんな武器を渡してくれて、見返りも要らないとは」

南蛮人は薄く笑った。

「さあ……何と申しましょうか、わたくしの趣味なのですよ。あなたのような方をお助けするのは、さて、これから段取りについて詳細を打ち合わせておきたいのですが？」

「判ったよ！ そういうた積もる話はここではできない。あたしの屋形で打ち合わせよう。五郎狸、帰るよ！」

おみつ御前に呼ばれ、五郎狸は顔を上げた。

「あの御前さま、わたくしはここで仕事が残つてありますので、お話なら、お一人だけのほうが宜しいのです？」

その言葉に、おみつ御前は頷いた。

「そうかい、それじゃ仕事があるつていうんなら、早く済ませるんだよ！ あたしらは屋形へ帰っているからねー！」

おみつ御前と南蛮人が連れ立つて外へ出かけるのを確認すると、

五郎狸は見張りに声をかけた。

「おー、二三郎はもうよいから、お前は帰つていなさい」

見張りは逡巡した。五郎狸は言葉を重ねる。

「次の交替まで、半刻ほどであろう? わしが二三郎は見ているから、
先に休みなさい。あああ、帰つた帰つた!」

「左様で御座いますか、それではお言葉に甘えまして……」
見張りはようやく納得し、一礼すると去つていく。

ようやく誰もいなくなつて、五郎狸は土蔵の中へ戻つていつた。
ふつと溜息をつくと、隠れている時太郎に顔を向け、出し抜けに
声を上げた。

「そこに隠れてこる者! 出できなされ。居るのは判つているのだ

時太郎は凝然と立ちすくんだ。

説明

「出てきなさい。わしは、そちらの敵ではないよ」「五郎狸の声は穏やかだった。時太郎はその声に嘘は無いと思つた。

「おこ、出て行くなぜ」

お花と千代吉に声を掛け、荷物の隙間から姿を表す。五郎狸は時太郎の姿には驚かなかつた。
ところが、背後から千代吉の姿を認めると、さすがに田を見開いた。

「若様……！」

「五郎狸さん。これは、どういふことですか？」

千代吉の言葉に五郎狸は微かに首を振つた。

「あの震天雷の威力を目の当たりになさつたで御座いましょう？」
あのようなもの、狸穴まみあなの狸が持つと、碌なことになりませぬ。あれは、あまりに強力で御座います。いや、狸ばかりでなく、どんな勢力が持つても危険であろうと思ひます」

千代吉は頷いた。

「わたくしも、そう思います。母上はあの南蛮人にたぶら誑かされているのです！」

千代吉の言葉に、五郎狸はわが意を得たりという表情になつた。
「さすが、若様！ じつは、時太郎殿とお花殿のお一人が捕えられた時、わたくしがお救い申し上げようと思つていたのですが、先を

越され、いったい誰がと推察を巡らせていたのですが、若様だったのですね！」

「ねえ！ やつさからさつぱり判らないわ！ ちゃんと説明してよ！」

お花は苛立つてゐるのか、軽く足を踏み鳴らす。五郎狸はひょりと笑つて頷いた。

「左様か……。ちと説明不足であつたようで御座るな。

もともとは若様と狸御殿の姫さまとの縁組にわしが駆け回つていたころ、狸御殿の家老、芝右衛門殿と談判するようになつて、お互の理解を深めたのじや。その結果、狸穴と狸御殿は協力し合つことが肝要という結論になつた。

しかし、あの南蛮人が御前に近づくようになつて、状況が変わつた！ なんと、あの南蛮人め、御前に人間界への侵攻という考えを吹き込みおつた！

そのため、御前は狸御殿との縁組を解消し、あまつさえ戦いを仕掛けようといつ……。これは狸全体にとつて未曾有の危機と、わしは思ったのじやよ

五郎狸の長広舌に、皆ふむふむと聞き入つてゐる。

「それで密かに、わしは狸御殿と連絡を取り合つことにした。連絡にはつてつけの連中があつた」

ぽんぽんと五郎狸は手を叩く。

「それが、わたくし、という訳で……」

頭上から声が降つてきて、時太郎とお花は積み重なつてゐる荷物を見上げ、ぽかんと口を開けた。

荷物の上に立つていたのは豆狸まあだだった。豆狸は深々とお辞儀した。
「姿を消し、申し訳も御座いませぬ。しかし、どうしても五郎狸殿と連絡を取り合つ必要があつたので、やむなくあの場を逃げ出した、とこう訳なのです」

五郎狸が後を引き取る。

「これ、この通り、豆狸はこのように小そう御座いましょう? 今まで幾度となく、豆狸どもに協力願つたとこう訳で御座る」

時太郎は腕を組み、叫んだ。

「なんだ、それじゃおれがこの狸穴にやつてきたのも、そいつらの差し金か?」

五郎狸は「まあまあ」と両手を挙げた。

「すまん! なにしる、事は秘密を要するのでな。しかし若様とわしの思いが同じといつことが判つて、喜ばしいかぎりじゃ。南蛮人

の震天雷は、「じどり」とて廃棄せねばならぬ。そのこと、判ってくれるか？」

「そりや、まあ……」

時太郎は面白くはなかつたが、不承不承、頷くことにした。これで千代吉が狸御殿に同行してくれるなら、まあいいかと思つたのである。

「そりゃかい、そういう絡縄からいりだつたのかい！」

出し抜けの大声に一同は飛び上がつた。
土蔵の入口に、夕日を背に受け、おみつ御前が立ちはだかつていたのである。

御前の怒り

毒々しいほどの茜色の夕焼けが辺りを染め上げている。背後の光を受けたおみつ御前の輪郭が金色に彩られていた。

おみつ御前の後ろからは、数十匹の狸が、手に手に竹槍や棍棒を持ち、じりり、じりりと迫ってきている。ゆっくりと顔を振り、わざとらしい上機嫌を装つて、おみつ御前は語りかけた。

「なあらほびねえ……、どうも近い五郎狸の様子がおかしいと思つていたが、まさか刑部狸らと通じていたとは、夢にも思つていなかつた。南蛮人との打ち合わせが済むと、あたしが見張りを命じていた狸がふらふら帰つてくるじゃないか。訳を聞いて、あたしゃはん、と思つた訳なのさ」

「「、御前さま、」これには訳が……」

「そうだらうともさー。」

慌てて弁解しようとする五郎狸に、おみつ御前はびしりと言い返した。

「まみあな狸穴を裏切つて、いつたいどんな見返りを刑部狸は約束したのかね？ お前は汚い、裏切り者だ！」

ぐつと指をし、怒鳴る。

おみつ御前はさらに千代吉を睨んだ。

「千代吉！ なんでお前は、こんな奴とつるんでいるんだい？ そんなんに狸御殿のお姫さまが恋しいのかえ？ あんた知つていいのかい、あの姫さまは、とんでもない淫乱狸だつてことを？ 刑部狸の部下を、今まで何回も咥え込んだつて噂は聞いていないのかえ？」

千代吉は俯いてしまった。

時太郎は前へ出て口を開いた。

「おい、あんた千代吉の母親だろ？　自分の息子に、その言い方はないだろ？！」

すう　、とおみつ御前は息を吸い込む。

「おだまつ！」

おみつ御前の大音声に、土蔵の屋根の瓦が一、三枚からからと音を立て落ちていった。

きいーん、と時太郎とお花は耳鳴りに一瞬、頭の中がぼうつ、となっていた。まわりの狸たちは、おみつ御前のこの大声を予感していたのか、早手回しに両手で耳を押さえて無事であるようだ。

「やつぱり、お前たちは狸御殿からやつてきた諜者なんだ！　諜者^{スパイ}は見つけ次第、死刑と狸穴の撃だよつー　おいつ、こいつらを殺しておしまひつー！」

おみつ御前の命令に、今まで武器を構えて控えていた狸たちが一斉に動き出した。

はつゝと時太郎は身構える。全身の筋肉が戦いに備え、張り詰めた。

「動くなつ！ これが見えないのかつ！」

その時、甲高い声があたりを圧し、思わず全員が動きを止めた。全員が声の方向を見上げる。

「わつー！」とばかりに、おみつ御前が立ちすくんだ。

なんと荷物の天辺に豆狸まわだがすつと立ち上がり、その左手に握っているのは一本の震天雷ダイナマイト！ しかも、右手には燐寸マッチが！

「お、お、お、お前……何をする氣だい！」
おみつ御前が喚く。

「いりやするのや！」

豆狸はしゃつと音を立て、燐寸の先を荷物の表面に擦り付けた。ぱちつと火花が散つて、燐寸の頭が燃え上がる。ぱつゝ、と燃え上がる焰の先を、ゆづくつと震天雷から伸びている紐に近づけた。

「や、や、や、やめやつ！ 馬鹿な真似はおよじつ！」

おみつ御前は悲鳴を上げた。

豆狸は笑つた。

「馬鹿な真似？　いいや、馬鹿な真似じゃありません。こんなものは、やつさと始末するに限ります！」

豆狸は燐寸の炎を、紐に近づける。

ぱちぱちぱち……

紐が細かな火花を散らし、燃え上がった。

すかさず、火が着いた震天雷を、豆狸は先ほど南蛮人が蓋を開いたままの箱へぽいとばかりに投げ入れる。

忽ち、箱の中に並べられた震天雷の紐に火が燃え移った。

「ひいいい～～～！」

おみつ御前は喚くと、さつと千代吉に近づき、片手でひつ攫うと、脇目もくれず、脛を飛ばして走り出す。

時太郎も、お花と五郎狸に向かつて叫んだ。
「何してゐる！ 逃げるぞ！」

お花と五郎狸は、びくつと我に帰つた。三名は、武器を構えたままの狸の群れに突進する。

狸たちは「はつ」とばかりに身構えたが、時太郎たちはそれらに目も眞れず、足音を立て駆け抜けてしまう。狸たちは、呆然と三人を見送つていた。この狸たちは震天雷の威力を目にしていない。

そうと氣付いた時太郎は振り向き、叫んだ。

「お前たちも逃げろ～！」

狸たちは只事でないことを悟つたのか、慌てて時太郎たちの後を追つて走り出した。すでにおみつ御前は息子の千代吉を脇に抱え、一心不乱に遠ざかっていく。

奇妙な追いかけっこが始まった。

先頭はおみつ御前、その後を時太郎たち三名、殿軍に、武器を構えた狸たち。

走りながら、お花は時太郎に話しかけた。
「豆狸、どうなつちやうのかしら？ あいつ、あそこから逃げ出せたかしら？」

時太郎は短く首を横に振つた。

「知らねえっ！ とにかく、おれたちが危ないんだ……！」

時太郎が言いかけたその時、不意に背後から空氣の塊といった感じの熱風が背中を打つた。

「わっ！」とばかりに倒れこむ。

ついで「どお～ん！」といつ爆発音が鼓膜を打つ。同時に、ずしりん、と腹に響く震動。

地面に倒れこんだ時太郎は、振り返つた。

見ると、土蔵のあつた場所から、真つ赤な夕空に向かつて、もくもくと黒煙が立ち上つている。

「豆狸ちゃん……。可哀相……」

お花は涙ぐんでいる。

ひいいい

甲高い悲鳴が空から降ってきた。

なんだと見上げると、ぽつんと小さな黒い塊が落下していくところだった。塊には手足が生えている。

思わず時太郎は両手を捧げて、それを受け止めていた。

「豆狸だった。」

全身の毛がちりちりに焼け焦げ、火薬と毛の焦げる匂いが漂っている。

「ふう……」

豆狸が溜息をつくと、口からまあつ、と血の煙が吐き出される。お花は覗き込み、呟いた。

「よかつた、生きてる……」

時太郎は耳を近づけた。

豆狸は、時太郎の手の平で小声でなにか呟いている。

震天雷がよ〜

震天雷がよ〜

震天雷が百五十本……

畜生、狸穴なんか、ぶつ飛ばせエ！

「歌なんか唄つて、呑氣な奴だ」
時太郎とお花は顔を見合わせ笑つた。

「お前ら……許さないからねつ！」
そちらに顔を向けると、おみつ御前が怒りに震え立つていた。
「よくも、あたしの震天雷を……もう、我慢できなによつ！」
おみつ御前は吠え立つた。

「なにを許さないんだ？」

そのおみつ御前の背後から、野太い声が聞こえてくる。
おみつ御前は、ぎくつとなつて振り返つた。

そこに立つっていたのは刑部狸だつた。

「刑部狸……」

おみつ御前は忽ち冷静さを取り戻した。千代吉を抱えていた手を離す。千代吉は地面に落下し、鉄の茶釜の体のせいで、がちちゃんと音を立てた。

「来ていたのかい。随分と手回しがいいもんだね」

刑部狸は頷いた。

「ああ、お前が危険な大量破壊兵器を隠し持つてているという連絡があつてな。真相を確かめるため、わざわざ出張つてきたのだ。どうやら、その報告は確かのようだ」

刑部狸の視線はもくもくと黒煙を上げている土蔵の残骸に向けられている。おみつ御前は「へつ」と怒りの声を上げた。

時太郎は刑部狸が狸御殿の兵を連れてこることに気付いた。さうに芝右衛門も控えている。

ざわつ、と足音を立て、狸穴の狸たちが武器を構え、狸御殿の兵隊たちに立ち向かう。

一触即発の空気が張り詰める。

「お待ちあれ!」

せつと両手をひろげ、芝右衛門が急ぎ足になつて睨み合ひつ刑部狸とおみつ御前の真ん中に駆け込んできた。

待たれよ、待たれよと繰りかえすと、おほんと咳払いをする。

「双方ともここで戦えば、多数の死傷者が出ることは必定。そこで、この芝右衛門、一つ提案したい！　この際、古法に則り、双方の代表者が戦うということでは如何かな？　つまり、一騎討ちで御座る！」

おみつ御前は一きなり爆笑した。

「ははははは……！ 一騎討ちだつて？ 面白いねえ……。つまり、あたしとその刑部狸で雌雄を決するという訳だ。文字通りね」

刑部狸は微かに眉を顰め、芝右衛門を見つめた。芝右衛門はわざと明後日の方角を見て、刑部狸と目を合わせない。その様子に何か考えがあるのらしくと見当をつけたのか、刑部狸は頷いた。

「いいだらう、お前とおれとで決闘だ！」

応諾の言葉を聞くや、おみつ御前は羽織っていた内掛けを脱ぎ捨てる。

刑部狸は腕をぶるんぶるんと回転させ、首の関節を「しゃしゃ」と鳴らす。

その真ん中に芝右衛門が立ち、宣告した。

「勝負は三本一、どちらかが、参ったと言つままで！ それでは始めて刑部狸に突進した。

がつーん、と音を立て、おみつ御前と刑部狸の頭蓋骨が激突する。くらりくらりと双方とも一瞬、気が遠くなつたのか、足下が頼りなくよろめいた。

が、同時に我に帰り、さつと両手を前へ突き出し組み合つた。

「ぐぐぐぐ　つー」

お互い歯を食い縛り、全身の力を込め、相手を押しやる。しかし双方の力は互角のようで、踏ん張った足下の地面が深く抉れ、土が盛り上がる。

ぐわつ、と口を開き、おみつ御前は刑部狸の肩に食いついた。

「ぐあ　つー」

刑部狸は怒りの咆哮を上げた。

足を飛ばし、おみつ御前の踵を払う。態勢が崩れていたおみつ御前は踏鞴を踏んで堪えた。だが、刑部狸に食いついていた口は、堪らず離してしまった。

ふーつ、ふーつと息を荒げ、双方は睨み合つた。

「むん！」とばかりに刑部狸が拳を飛ばし、おみつ御前の頬げたを張り飛ばす。

「きん！」と音を立て、おみつ御前は横を向く。おみつ御前は殴られた頬を押さえ、歯の噛み合わせを確かめるように顎を動かすとにやつと笑い、今度は刑部狸の頬げたを張り返す。

刑部狸の頬が「ぼくつ」と低い響きを立てた。にやりと刑部狸も笑い返す。

殴り合いが始まった。

「凄え……」

戦いを見守っていた時太郎は、思わず贊嘆の声を上げていた。
どちらも一歩も引かず、逃げず、ひたすら延々と殴り合いを続け
ている。

「どうなっちゃうの?」

お花が心細そうな声を上げる。五郎狸も首を振っている。

「芝右衛門殿のお考えは判りませぬ。何を狙っているのか……」

やがて頃合悪じと見たのか、芝右衛門は殴りあつての間に割つ
て入り叫んだ。

「一本終了! 勝負は引き分けといたす。あと一本の勝負が残つて
御座る。まずは、休憩を取られよ」

肩を泳がせ、喘いでいた刑部狸とおみつ御前は芝右衛門の言葉に
救われた様に溜息をつき、のろのろとお互の狸たちの群れに帰つ
ていった。

どたり、と尻を地面につき座り込む。わっとばかりに配下の狸が
群がり、お互いの首領の肩を揉むやら、団扇で扇ぐやら大騒ぎであ
る。

と、芝右衛門がちよこちよこと五郎狸に近づき、何か飲み物の容
器を手渡し、その耳に、いそこそと囁いた。
五郎狸は目を瞠つた。ぽかんと口を開け、芝右衛門を見上げる。

芝右衛門は悪戯っぽい顔つきになつて頷いた。

五郎狸は激しく頷き、容器を抱えおみつ御前に近づいた。

その容器の蓋を取り、おみつ御前に飲ませている。時太郎が刑部狸を見ると、芝右衛門もまた、同じ容器の蓋を開け、中身を刑部狸に飲ませている。

お互い喉が乾いていたのか、「ぐぐぐ」と中身を飲み干していた。

芝右衛門は再び双方の中間に立ち、宣言した。

「第一回戦の勝負を始めます……お互い、思い残しの無いよう、健闘を祈ります」

芝右衛門がさつと手を上げると、唸り声を発し、刑部狸とおみつ御前は立ち上がった。

相當に疲れているのか、ふらふらと上体が泳いでいる。よひよひと近づくと、がつきとばかりにお互いの身体を抱きしめるように組み合つた。

「まだやるの？ こんなのは、止めればいいのに……」

「まあ、見ていて御座れ」

お花の眩きに、何時の間に戻ったのか、五郎狸が目じりに皺を寄せ、含み笑いを浮かべている。時太郎は首をかしげた。

「どうこう」と？

「芝右衛門殿の計略で御座るよ」

五郎狸は楽しそうに答える。

刑部狸とおみつ御前は組み合つてゐる。

だが前の試合で体力^{スタミナ}を消耗したのか、息を荒げるだけで中々動こうとはしない。

ふーつ、ふーつといつ息だけが聞こえている。
お花は眉を寄せた。

「なんか、変……」

もぞもぞと刑部狸が身じろぎをした。

「あらひー」と、お花が顔を真つ赤に染めた。慌てて時太郎に近寄ると、その目を両手で塞ぐ。
「おいつ、何をするんだ！」
「あなたは見ちゃ駄目！」

お花が叫ぶ。

時太郎はお花の手を振り払つた。

「なんだよう……」
「だつて……」
お花は俯いた。

再び試合に視線を向けた時太郎は驚きの余り目を見開いていた。

刑部狸の股間から、 がによつをりと××している。刑部狸の両耳は充血し、食い縛つた口許からせ、涎がたらたらと溢れていた。

「けええええつー！」

刑部狸が奇妙な叫び声を上げる。

「ひょおおおおつー！」

おみつ御前もまた、叫んだ。

「ふぐううー！」

「巨は強く、お互いの身体を抱きしめあつ。ずりつ、ずりつといつの体が擦りあい、熱氣で湯気が上がつた。

そのまま、じて、と横倒しに地面に転がる。じるじると抱き合いながら転がると、刑部狸が上になり、腹這いになつたおみつ御前に背後から圧し掛かつた。

「ふんっー！」

刑部狸は低く唸ると、ぐいと腰を動かし、 をおみつ御前の女#に突き立てる。おみつ御前はすでに腰を浮かし、大股をひろげて受け入れる態勢になつてゐる。

「ふんぎゅー！」

おみつ御前はかつ、と口を開き、仰け反つた。刑部狸はぐい、ぐいと腰を前後に激しく揺らせている。かくかくかくと、動きが素早くなつた。

(以下三行抹消)

びくうつ！ と、刑部狸は痙攣し、その尾っぽがぴん、と直立した。ぱかっ、と口が開き、大きく息を吐く。ずりつ、と刑部狸はおみつ御前の身体から離れ、どすんとばかりに尻餅をつく。びゅつ、びゅつと（以下十七文字抹消）。

「ぐふつ……ぐふつ……」と、おみつ御前も腹這いになつたまま奇妙な唸り声を上げていた。ほかほかと、巨大な（以下二十五文字抹消）。がくりと腰を折ると、そのまま横倒しになり、頭を上げて刑部狸を見つめる。

刑部狸もまた、おみつ御前を見つめ返した。

ふつと視線を逸らすと、刑部狸は背後の芝右衛門を見やつた。

「芝右衛門……」

名前を呼ばれ芝右衛門は「へつ」と小腰を屈めて近づいた。刑部狸は肩で息をしながら話しかけた。

「おぬし、やつたな？」

「へへへ……」

芝右衛門は両手を擦り合せた。

焚き火が辺りをオレンジ色に染め、その周りに狸穴の狸、それに狸御殿からやつてきた狸たちが輪になつて囮んでいる。みな押し黙り、どうにも居心地が悪そうだ。

時太郎は空を見上げた。

夜空には一面の星が広がり、双つの月が水平線ぎりぎりに浮かんでいる。

ざああ、ざああと波の音が単調に聞こえ、つい思いは、まだ見ぬ母親のことにもつた。

これで翔一を連れ、京の都へ向かうことができそうだ……。

ふつと砂浜を見ると、波打ち際に刑部狸とおみつ御前の大好きな身体が焚き火の明かりに照らされ、浮かんでいた。二匹は顔を突き合わせ、何事が相談しているようだ。その後ろに、神妙な顔つきで芝右衛門と五郎狸が控えている。

やがて話し合いが終わつたのか、芝右衛門と五郎狸は肩を並べて時太郎の側へやつてきた。芝右衛門は満面の笑みを浮かべている。

「まったく威而鋼の効き目は覗面で御座るなー。お一方、まるで若狸のように張り切つて交合なさつて……。これで狸御殿と狸穴は再び、一つになれまする」

五郎狸も同意した。

「左様、左様。お二方はもともと若い頃、好き合ひつておつたのじゅ

が、喧嘩別れをしてしまい、それが狸御殿と狸穴二つに別れる原因
じゃつたのじや。それがあれが切つ掛けで、このたび夫婦となられ
る」ことになつて、まことに田出度い！」

一匹の言葉にお花は眼を丸くした。

「そ、それじゃ、そんなことでお互い、喧嘩腰で喧嘩^{いが}み合つていたつて訳？ 馬鹿みたい」

五郎狸は首を振つた。

「いやいや、お一方も實に頑固者で御座つてな……なんとか我らも復縁を願つておつたので御座るが、此度のことはよつて切つ掛けとなり申した。ま、瓢箪から駒とでも……」

火明かりを受け、千代吉は呟いた。

「それじゃ、わたくしと狸御殿の姫さとの縁談は、自動解消になりましたね。なにしろ義理の兄妹ということになつたのですから」

心なしか、千代吉はほつとしているようだ。 芝右衛門は肩を竦めた。

「ま、そつ言つて御座るな。若様には、いづれ良い縁談をお勧めいたす」

その時、刑部狸とおみつ御前が連れ立つて近づいてきた。

狸穴と狸御殿の狸たちは居住まいを正し、一匹の首領を見上げる。刑部狸は重々しく宣告した。

「皆の者！ われら一匹は、このたび夫婦となることに決まつた！ 長きにわたり、別々の道を歩んでいた狸御殿と狸穴の狸たちが、ついに元通りに一緒になるのだ！」

おおっ、と狸たちから喚声が沸き起つた。刑部狸の言葉を引き取り、おみつ御前が後を続ける。

「そつと決まつたら祝宴だよ。さあ、皆々の狸たちよ、祝宴の腹鼓を聞かせておくれ」

狸たちは全員、勇躍して立ち上がつた。

最初に、刑部狸がその大きな腹を突き出し、びおーんと低く鼓を打つ。

ぼこぼん、ぼこぼんと狸たちがそれに応じる。

ちやかぼこ、ちやかぼこと甲高い金属音を上げているのは千代吉だ。千代吉はどこから持ち出したのか、箸を両手に、鉄の茶釜の腹を陽気に叩いている。

時太郎は月を見上げた。

黙りこくつている時太郎の様子に、お花が声を掛けた。

「どうしたの？」

時太郎は微かに頷いた。

「あの双つの月から聞こえるんだ……」

「えつ」と、お花は聞き返した。

「聞こえるつて、何が？」

時太郎は首を振つた。

「判らない……でも、聞こえる……」

夜は更けていく。

京へ！

翌朝、時太郎とお花は狸御殿に戻り、翔一と再会していた。正門に連れ出された翔一は、ひょこひょことした頬りない足取りで現れた。時太郎は声に驚きを含ませて訊いた。

「お前、本当に翔一か？」

時太郎は思わず真顔で尋ねていた。

「はあい……」と、答えた翔一は、僅かの間にがらりと面変わりしていた。

あれほどまでにふくよかだった顔つきは、げつそりとやせ細り、肉が落ちたのか、頬の皮膚がたるんで垂れ下がっている。大きな眼鏡の奥から覗く二つの田玉は、落ち窪んだ眼窩からぎょりぎょりと飛び出さんばかり。

「どうしたんだ！ 病気か？」

「いいえ」と翔一は首を振った。どういう訳か、顔には薄つすら笑いを浮かべている。なんだか、幸せそうでもある。

「わたくし、大人になつた心持で御座います。や、参りましょうか」
その時、翔一は地面の小石に躓いた。倒れはしなかつたが、ぴょんと飛び上がつた翔一は、奇妙な叫びを上げる。

「ほほほほほ！」

ぴょん、ぴょんと何度もその場で飛び上がる。腰を抑え、膝を屈めた。

「う、と仰け反り、朝口を眺めた。

「ああ、お口様が黄色く見える……」

時太郎は「処置なし」と天を仰いだ。どん、と翔一の肩を叩く。

「行こうぜ！ 隨分と手間取った」

「あ、いけません！ そんなところを叩かれては、で、出でてしまう……」

股間を押さえ、眉を顰めた。

と、狸御殿から姫の叫び声が聞こえてくる。

「翔一さま！ またお出でくださいませね！ 姫は待つて
おりまする」

京へ！（後書き）

第四部の終了です！ いよいよ、次回からは総ての謎が明かされる
「御門の章」に続きます。時太郎、時姫、三郎太、そして【御門】
の謎が明らかになる、最終章です。お楽しみに！
それから、感想を書き込んでくれた人、有難う！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548o/>

河童戦記～狸の章～

2010年11月20日02時42分発行